
世界の端で。

あるくり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の端で。

【Nコード】

N86760

【作者名】

あるくり

【あらすじ】

ひよんなことがキツカケで、世界と距離を置いた人。

そんな人たちが集まる場所・鈴城学園に新任教師がやってきた。

ふたりの生徒を受け持つことになり、濃い学校生活に期待をする。

ふたりの生徒の過去が垣間見え、また自分の過去にも向き合うことになる。

【プロローグ】

【プロローグ】

苦しみながら死んでいくのと
苦しまずに死んでいくのでは

どっちが充実するのだろう

誰かの前で泣き崩れるのと
ひとりで寂しく泣くのでは

どっちが悲しそうに見えるのだろう

たとえ世界に置いていかれても
独りぼっちになっても

知らん顔をされても

何かを失っても

誰も話を聞いてくれなくなっても

大丈夫

きつとまた戻ってゆける

人間として生まれてきてしまったのだから
最後まで人間を全うしよう

大丈夫

きつとまた戻ってゆける

元の場所
世界の端で

【IQで人は量れますか】

【IQで人は量れますか】

「おはようございます」

「あーどうもどうも。大橋くんですよ」

「今日からよろしくお願いいたします」

—— 大橋灯 男 趣味はジョギング

「硬い挨拶はいいじゃないですか」

今日から新人教師。

採用試験に合格すると思っておらず、通知が届いたときは飛び上がるほど嬉しかった。

家からも近いこの学校は、他の学校とは違う雰囲気を漂わせている。

「早速ですが、大橋先生には高校1年生のクラスを持っていただき
ます」

「あ、はい。生徒は何人いるのでしょうか？」

「ふたりです」

「……は」

学園長がにつこり笑いながら言った。

外観も不思議な学校だが、どこか中身もおかしい。

紅茶にはちみつをドバドバ入れる学園長が、さっきから熊に見えて仕方がない。

「ふたり……ですか」

「事前に連絡を差し上げたと思いますが、ここは普通の学校ではないのです」

門をあけると一気に世界が変わる。

学校の前をたくさんの人が通っているのに、まるで何も見えていないかのように流れる。

「はい、お話は伺いました。でも未だに何かなんだかです」

「ちょっとしたキツカケで世界に置いていかれた子どもたちが大勢いる。」

「ここはそんな学校なのですよ」

「はあ」

「子どもたちに会えばお分かりになると思いますので、こちらへどうぞ。」

今すぐにも授業をしませんか」

ぐわん、と学園長の体が起き上がった。

紳士な立ち振る舞いに紳士な格好、紳士じゃないのは紅茶の飲み方。応接室のドアをあけて軽く手を振った。

「そのふたりは変わっていますが、とてもおもしろい子たちです」

「ふたりにも何か過去があるんですか？」

「まあそうですね。」

世界に置き去りにされた、と言いますか」

「……」

廊下の風が自分のいた母校を思わせる。

懐かしさを回顧する前に、自分のクラスにたどり着いた。

「ここです。」

1時間目はお好きなように使ってください」

「はい。ありがとうございます」

「あーそれと。」

これもお使いください、ふたりの生徒の情報です」

丁寧にホッチキスで留められた冊子。

2枚目から、たくさんの文字が並んでいるのが見えた。

途端にめくるのを止めて、雑に抱えたままドアをあけた。

「おはようございまーす」

白を基調とした教室に、深緑のきれいな黒板、真ん中にはぽつんと机が2つ。

しゃべっていた生徒が同時にこちらを振り向く。

本当にふたりだけなんだ。

「初めまして、大橋灯と申します。

教師になりたてですが今日から君たちの担任です」

「おーパチパチー」

「パチパチー」

ふたりの女子生徒は変わったノリで答えた。

見た目も何もかもが普通で、この子たちが世界に置き去りにされたとは思えない。

すう、と息を吸った。

「えーと、名前はー……」

——弓矢奈緒 女

——日向柚子 女

「……え」

学園長にもらった冊子に書いてある名前の横の“情報”。
目を疑った。

——弓矢奈緒 女 IQ218

——日向柚子 女 瞬間記憶能力

テレビでしか見たことのないIQの高さに、名前を初めて聞いた能力。
ふたりの世界を見た気がした。

世界に置いていかれた、とはこのことなのだろうか。
常人離れた力に怯える毎日……ふと頭によぎった。

「神と私は幼なじみなんです」

日向柚子が口を開いた。
特に着崩すわけでもなく、きつちりと着ているわけでもない制服。
眼鏡をかけたその顔は、どこか幼げに見えた。

「神？」

「隣の弓矢奈緒のことですよー」

日向が手を向けた先に、携帯をいじっている弓矢がいた。
IQ218の——天才。
まるで他人の存在を消すかのような雰囲気、大橋は飲み込まれた。
頭がいいんだろうな。
というかもう頭がいい天才だってことは分かってる。

「おいおい、これでも一応授業中だぞー」

「……」

「……何やってんだ？」

「アドレス帳に入ってるすべての名前の最初に“米”って入れてんの」

「くだんねえ！」

思わず出た何も考えてません丸出しな言葉。

弓矢がこちらに目を向けた。

「やーん！神可愛いですー！」

「うつせ」

「あ、いや、何もそんな言い方しなくても……。元はといえば僕があんなこと言ったからなんだし」

「いえいえ、神はツンデレなんですよー」

「はぁ……」

どちらに対しても敬語でしゃべる日向は、弓矢のことを「神」と呼んでいた。

当の弓矢は尚も携帯の画面とにらめっこ状態である。

ふたりが、自分の、生徒。

何はともあれ、このふたりが大橋にとって初めての生徒なのだ。これから一緒に過していくにあたって早く打ち解けなければ、という考えでいっぱいだった。

「日向はどうしてそういう呼び方なんだ？」

「神、ですか？」

「幼なじみならもっと親しくしてもいいと思うんだけど。敬語もそうだしさ」

「敬語は癖なんです。」

神って呼ぶことに関しては長くなるんで言えませんが、まあそうですね、

神様みたいな存在だから……って感じですか」

爪をかりかりといじりながら答える。

いつからか人間は神様という存在に頼り始めた。

時には蔑むくせに、またある時には泣きついてくる、そんな人間の上にいる神様。

人それぞれの塑像がどんできあがっていく中で、きっと日向の神様は弓矢だけなのだ。

「あたしは神様なのか」

「前も説明したじゃないですか。」

まったくもう、その反応これで11回目ですよ」

「てへっ」

遂にデレを見せた弓矢は、机の上にごろごろと頭をすりつける。

その姿を見た日向がキヤーキヤー騒いでいた。

仲の良さはうかがえるが、どうもあの情報がちらつく。

異常なほどのIQの高さを持つ弓矢、瞬間的にすべてを記憶できる日向。

ふたりが幼なじみである証拠を探す気はないが、幼なじみであることは奇跡に近い。

隣に変わった能力を持った人間がいたら打ち解けるはずがないだろう？

気味が悪い、と距離を置くだろう？

大橋はふたりの過去を無性に知りたくなった。

「先生いくつですかー恋人いるんですかーまあ興味ないですけどー」

「あんなあ弓矢」

携帯を鞆にしまいながら弓矢が言った。

情報が入った途端に、ふたりが普通の子供ではないと意識できる。

いや、意識してはいけないのか。

「あ、ビッグブリッジ先生も行く？体育館でライブあるらしいんだけど」

「大橋です。」

ライブ？ここの生徒がバンドとかやるの？」

「そうですねー。」

この学園ではかなり有名なんで、ビッグブリッジ先生もぜひ」

「大橋です。」

そうなんだ、なんか発見ばっかで忙しいなあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8676o/>

世界の端で。

2010年11月28日23時48分発行